

## 『中國の哲學者孔子』序文における道教、佛教情報の試譯

井 川 義 次

ここに示すのは、中國布教イエズス會士フィリップ・クブレ等による本格的な中國哲學ラテン語の紹介書『中國の哲學者孔子』<sup>(1)</sup>（二六八七）におけるヨーロッパに向けての本格的な道教、佛教の紹介文に對する試譯である。佛教に關しては周知の通りキリスト教日本布教のフランシスコ・ザヴィエルが東アジアの宗教として批判的に取り上げ、中國布教のマテオ・リッチが『天主實義』<sup>(2)</sup>（二六一〇）や『中國キリスト教布教史』<sup>(3)</sup>（二六一五）で同様に批判對象として攻撃している。<sup>(4)</sup>一方リッチは來華當初は老子の無限・無窮の實在に關する思想については好意

的であつたが、後に民間信仰における偶像崇拜、典禮行為に關する忌避から、道教批判に轉ずる。その後ライプニッツが研究者としての二〇歳代で見たプロテスタント神學者シュピツェル編『中國學藝論』<sup>(5)</sup>（二六六〇）では道教二教ならびに漢字・易圖、「四書五經」等儒教——情報に關する解説が行われている。

しかし筋道だつた道教、佛教情報としてヨーロッパに廣く流布したのはルイ十四世の支援になるこの『中國の哲學者孔子』が初期のもので極めて重要である。というのも本書はフランスの威信を懸けて國家圖書館から出版

されたため、讀者もライプニッツ、クリスチャン・ヴォルフ、ビルファイガー、ヘルダー、ヘーゲル等、理性の時代から啓蒙主義ドイツ觀念論に至る哲學者、百科全書派ヴォルテール、デイドロ等、フランス百科全書派の立役者も目にし、著述に反映したものだからである。道教、佛教等、中國情報に對するヨーロッパの理解、受容、影響關係について考察するのに不可欠な文献であるといつてよい。佛教の部分について譯したのは、純インド的佛教のみならず、中國佛教の道教化・玄學化した側面も翻譯文から読み込みうるためである。

一九九二年に書きとどめておいた譯文に若干手を入れたものである。紙幅の關係上、今回は試譯を示すにとどめ、論稿等は後日の公表を期したい。なお（一）内は著者自身による補い、（二）内は譯者の補いである。なお佛教に關する部分に關しては安次嶺動との共著論文<sup>(6)</sup>が<sup>(6)</sup>り參考されたい。

### 第二節

哲學者李老君と中國において道士と呼ばれるその弟子たちの教派の略述

われらが讀者に、豊かな概觀を與えるため、この教派の祖、哲學者李老君 Li-lao kiun、俗に伯陽 Po-yam、あるいは老聃 Lao-tan と呼ばれる人物がいたことが知られなければならぬ。彼は孔子と同時代人だが、若干年長である。

次の話が傳えられている。母が彼を胎内に宿して八十年後、左脇腹に道が通じてポロリと生まれ出た。母はかかる不思議な出生の後、直ちに世を去つたと。

彼の書物は今も残っている。（信じられるところでは）教派の者たちにほとんど一箇所も改作されていないという。それは諸徳について virtues、名譽を逃れること、行爲と人間的事柄の輕蔑、人間的事柄にまさつて魂 Animus が享受できる幸福な孤獨さ等について、哲學者らしい若干の事柄を記述している。

さて、彼が事物の生成について論じた際、次の文章を、

他の文章の間で述べている——教徒たちは、その文を哲學の公理中、最貴なものとして不斷に朗誦する——。すなわち「道生一、一生二、二生三、三生萬物 [Tao Jem ye. Ye Jem ulh. Ulh Jem san. san Jem van ye.]」と。すなわち「法 Lex、あるいは理性〔理法・理由・根據〕 ratio は一つのもの unum を生んだ produxit (過去形)」。一つのものは二つのもの duo を生んだ。二つのものは三つのもの tria を生んだ。三つのものは全てのものどもを生んだ tria produxerunt omnia.」ということである。人々の發音は、曖昧模糊として、古代人の祈りのごとくにするのが常である。

一つだけはっきりしているのは、老子は、神が有體的 corporeum なものと考えていた點では眞理から離れた概念だったとはいえ、神が他の神々あるいは王に仕える人々を支配していると告白し、最初の至高の神 Numen の或る概念をもっていたことである。

人々は至る所で老子が學問、化學 Chirnica [chemical?] の創立者・元祖であったと傳えている。し

かし、この師匠が結局、どんな人物であったにせよ、次のことはまったく議論の餘地はない。數世紀後、彼の弟子あるいは弟子と詐る多くの性惡の墮落した人間たちが現れた。確かに中國全國で、魔術 Magia の手管の案出者、あるいは實際にそれを宣傳する者が現れたのである。すなわち第四番目の秦王朝の始皇帝という有名な、知識人 Literator (儒者) の敵、それ故、諸文獻——彼はあらゆる書籍が焼き盡くされることを命じた——の敵である帝王の時代から後、魔術の道を開いた者どもに事缺くことはほとんどなかった。しかも彼は魔術者たちから、また李老君の弟子と偽る者どもから、(長生藥 Cham Jem と呼ばれる) 不死の藥酒——すなわち永遠の生命を死すべき者 (人間) たちに與える——が眞に存在すると信じ込ませるスキを與え、また烏々を經巡つてその藥を捜し出すことを命じたのである。

魔術は初めは大したものではなかったが、續く漢 Han 王朝の時代、末流たちは最大限増大した。それは漢の第六代、武帝 Vu ro と稱された皇帝が、李老君とい

う名の師匠に對する忌まわしい魔術の實習に全力を傾けた時代である。おそらく彼は皇后を寵愛していたために、初期の知識人（儒者）と孔子の哲學を遠ざけ、替えるに、もう一方の李老君の——しかも、信じられている通り劣悪化した——哲學を上位に置いたのである。だが〔この哲學は〕、むしろこの女性の好奇心と氣まぐれから受け容れられたに過ぎない。傳承では、新教派を自稱する者どもによる大混亂が宮廷に起こつたという。その時代、皇帝が愛していた妃の一人が死亡した。皇帝が身罷つた妃への思慕に耐えきれなくなつたとき、一羣の魔術士の内で妖術を用い、亡き妃の幻影を、恐れる皇帝の眼前に現出して見せた者があつた。有害な術にまんまと掛かつた皇帝は、多くの氣違い沙汰に狂い、度々不死の藥酒を口にした後、結局、自分も死なねばならないことを悟つた。彼は、今ほの際に、中國のため、邪惡な術と術士らを嫌惡しつつ、己の輕薄さに號哭したのである。だがこのペスト〔害惡〕は、決して皇帝の死とともに消滅しなかつた。

なるほどこの教派からでないが、同じ王朝の治世下に、かの張道陵 Cham taolin と呼ばれる者が登場した。そして彼の末流たちが惡魔の術をより廣範に世に廣めたのであつた。その内、張道元 Cham taoyen はさらに際だつた名聲を得た。そこで帝國全土に兩者の監督・管理に委ねられ、その豫言によつて聖別された教派の寺院が建立された。このことは惡魔の仲間とともに神々の列に、仙人 Sian gin すなわち不死の者と呼ばれる者の列に名を加えられた一羣の者たち全てを記した、魂の讓渡書からも明らかである。そして唐 Tam 王朝の皇帝たちの迷信と狂氣が、この教派の指導者たちを天師 Tien pi、すなわち天の師匠ら coelestis magistri〔複數〕という榮譽ある稱號で、飾つたのである。

この王朝の始祖は老君 Lao kün に對して、偶像と同じく寺院を捧げた。第六代玄宗皇帝は、老子の彫像を宮廷に導き入れさせしている。今やこれら詐欺師たちの末流は世俗を超えた榮譽にあり、さらに高貴な血筋や地位に生まれた者たちは、階級の代理者の恒久的な地位に満

足し、江西 Kiam 地方の廣大で壯麗な邸宅に住み着いた。非常に多くの人々が屢々この地を訪れ、病氣平癒を求め、好運を願ひ、もしくは全生涯を通じて教育が受けられることを祈願する。

天師の職責を負う者は、虚偽とペテンに惑わされた人々、肉筆の神聖文字や、その他の惡魔的な術によつて洗脳されながらも心底喜ぶ人々、また空になるまで賽錢をはたきながら、しかも期待に満ちた人々に、功德を與えるのである。

さらにこれら惡魔的な術は宋 Sum 王朝の第二代眞宗と呼ばれる皇帝の時代に、勢力擴大したように思われる。眞宗はその治世の十一年、すなわちキリスト紀元一〇〇一年に、その他のペテンと譭言に惑わされ、天から書物が下つて來たと信じた〔天書〕。それは〔實は〕詐欺師や魔術師たち〔王欽若ほか、道士ら〕、あるいはその從者の惡靈 *cacodaemones* が、夜陰に乗じて都城の名高い門から吊したものであった〔天書事件〕。さらに魔術師によつて運ばれたこの書物を、お人好しな歩行者〔眞

宗〕が発見した。〔皇帝はこの書が〕最高の敬意をもつて受け取られ、宮廷へ行列で運び込まれ、黄金の箱にこの發見物が保管されるのを命じた。

以上全てから明らかなのは、哀れな中國王朝が常に惡しき状態へと轉落したということ、また（初めから述べたように）人間に有害なこの教派が今も用いる惡魔の契約と結びついた複雑な術と、そのしきたりが、迷信に満ちたものであることである。こうしたものが存在している間も、多くの人々は中國から魔術を遠ざけることをしなかつた。偶像崇拜輸入〔佛教傳來〕後は、特にこの崇拜を師として、一層熱心にその術を做ね、古い術に新しい術を追加したのである。

中國では、俗人は今でも屢々、廣く魔術を経験している。讀者がその内、何らかの實例を望むなら次の通りである。彼らは茫然として信じ易い羣衆の眼前に、異端の始祖、あるいは彼らの偶像の映像を、何もない空間に現出したり、ある時は大きな水盆のなかに帝國の變化、教派のすばらしい權威者や、新たに任命される長官を映し

出したりする。

ある時は籤に尋ね、悪靈召喚後に空から下った不思議な筆で、警告の文字をカードや壁の上、灰の上に描き出しもする。彼らは他にも、この手のペテンや迷信を實行するが、それらをここで多くの人々に知らせることは無用であろう。

確かなのは古代中國は、こんな邪惡なものに關わらなかつただけでなく、與り知ることなかつたということである。

しかし、どんな世代であれ、われわれは確かに中國傳道當初から、この世代のしきたりと同様に、古代の全てのしきたりを徹底的に根絶することをいつも課題としてきた。

さてキリスト教の著述家たちの熟慮と努力と同じことを〔中國の世代は〕試みていた。實際、教派の熟慮と意圖により、今や徐々に古代帝王の或者は、あたかも神々 numina のように見なされ、また或者は、今や以前は知られることのなかつた靈となつたのである。

なるほど上帝、すなわち至高の天の支配者という尊稱のもと、それらの者たちは各々、個別の要素に作用するとしても、天上の唯一至高の權威とは何の關係もなく從屬してもいない。さらに嫌惡すべきは、漢王朝の代に、この教派の（張儀 Chan Yi という名の）者が祭りあげた玉皇上帝 *Yo hoan xam ti* を——すなわち貴く神聖な至高の支配者 *preciosi Augusti Supremique Imperatoris*——の尊稱の下、彼のために建立した寺院で宋王朝（八番目の王朝ではなく十九番目の王朝）第八代皇帝徽宗が贊美するのを躊躇わなかつたということである。そのため義しき神の審判により、王家は崩壞に向かい始めたのだろう。祖先の王者たちのもと、すでに四千三百年以上、存續してきた中華帝國が、異民族、端的にいえば西洋人のくびき（でもあつた）、ダツタン人 *Tartari*（モンゴル）の支配に移行し、八十九年の隸屬状態に、屈從するのを餘儀なくされたのである。このことを大明の治世二十一年に、邱瓊山 *Kieu Kium xan* が、厳しい言葉で批判した。「この當時、徽宗皇帝が輕蔑すべき小人に上帝

の（すなわち最高の支配者の）名稱を與えたのはひどい冒瀆だった。これは全ての天の靈の中でも最も神聖にして崇敬すべき靈であるはずのものなのである。かくも甚だしい冒瀆によって、美德がひどく亂されないわけがなく、また嚴正な報いによって、この皇帝を減ぼし、最後にその王朝をも根絶せずにはおかなかつたのである」。

だがこの教派についてはもう十分である。今やこれに續く他の教派〔佛教〕へと進んでゆかねばならない。

#### 第四節 佛教 Foe Kiao と呼ばれる教派

と、その門弟たちの略述

漢王朝 *Han Familia* が主權を得て三百七十年後、すなわちキリスト紀元後六十五年、極めて厭うべきペスト〔害毒〕、すなわちいかなる災厄よりも破壊的な呪われた偶像崇拜の佛教が、宮廷の權威によって中國へと侵入した。同時にピュタゴラス派的な輪廻、數多くのお伽話や迷信、さらに無神論の信條が含まれた多くの書物が、インドから中國へともたされたのである。

このペストは現在、廣く蔓延しているためマホメット教徒を除けば、今となつては中國の文獻や學派のほとんどに感染してしまつてゐるだろう。この教派は確かに多くの教派の母なのである。

キリスト教徒の眞理、また特にわれらの勞苦に甚だしく對抗するこの教派について、讀者に簡單な解説を與えることが必要だと考える。その源がインドにあつたこと、中國で増大したこと、教義が普及したこと、かなり太古の昔に遡ることなどについてである。

中國で中天竺 *chun tien cho* と呼ばれるインドの南北間の地域を、淨飯王 *in fan van Reglus*〔小國の王〕

——その妃を摩耶 *Mo-ye* とらう——が領していた。この妃から息子が生まれた。その子は最初、名前を釋 *Xe*、あるいは釋迦 *Xe kia*（この名ですべての坊主とも *Bonzi* の汚物や迷信が表わされる。一方、日本人は崩れた中國語の音でシヤカ *Xaka* と稱する）といひ、二十歳となつてからは佛 *Foe* と名づけられた。

彼は本當に人間であつたのか、それとも惡魔による單

なる作り話(と、日本への使徒フランシスコ・ザビエルは考えている)かという論争がある。確かに、教徒たちがその起源について語る作り話でなければ、ザビエルに同意すべきだろう。

彼らは言う。「釋迦の」母の夢に白象の幻影が現れ、彼女の口から子宮へと入り込んだ、そのため世間では象によって妊娠したというのだと。また他の「意見は」より本當らしい。それは悪魔の力でどこからか運ばれた人間の種によって、妃がこの獸の相のもとに懐妊したので。インドでは確かに白色の象は高價なだけでなく、敬意を受けてさえおり、彼女の妊娠が疑われたなら、王國は宣戦布告される度に、多くの流血の争いに終わらずに濟まなかつただろう。

彼らはさらに言う。「釋迦が」母の右脇腹から生まれ出るや、彼女は出産のせいで卽座にこの世を去つたのだと。彼は人類の救世主(と、教派の者どもは口走る)であるのに、母親すら救うことができなかつたわけである。これから疑いもなく、この人間の怪物が、人間というよ

りも毒蛇の怪物であつたことが理解できよう。<sup>(8)</sup>しかも佛 Foe という字は實際、「弗ず non」と「人(偏) hono」によつて構成されていることが、それを物語っている。

彼は生まれ落ちると、すぐ兩足で立ち上がり、七歩進むと片方の指を空に向け、一方の指は地をさして「天上天下、唯我獨尊 Tien xun, Tien hia to ngo guei cun」<sup>(9)</sup>すなわち「天においても、地においても私一人だけが尊敬されるべきである」と、はつきりとした聲で宣言した。彼が要するに父親から生まれた Patre sit progentus<sup>10</sup>ことはこれから誰にも疑いは起きないだろう。これらの事柄は中國の君主制成立以來、千九百九年、キリスト紀元前千二十六年、周 Chew と呼ぶ三番目の王朝の四代目の支配者、昭王 Chao van が中國を統治した時のことである。

釋迦 Xe ka, あるいは Xaka は十七歳で、三人の妻を娶つた。その一人が子を産んだが、その名を中國人は三文字で羅睺羅 Lo heu lo [Rahula] と表記する。

彼は成人まで俗事を放棄しなかつたが、十九歳になる



と自分のせいで死んだ母に罪滅ぼしすべく荒野へ赴いた。彼はそこで、インドでヨーギ Yogues と呼ぶ四人の神秘哲學者〔裸行者〕たち Gymnosophistes に教えを受けている。

彼は三十歳になるまでに、恐らく日の出の兆し、明けの明星を觀想している時、その一つの星座の瞑想によって、瞬時に第一原理の本質をすべて見通した *totam repente essentiam Primi Principii perspectam habuit*。

そして私には何やら分からぬ神性によつて靈感に満たされ *divinitate nescio qua de repente afflatus*、佛 *Foe*、あるいは神〔性〕 *Numen* (インドでは *パゴダ Pagode* と呼ばれる) となったという。こうして弟子であった教師、人間であった神が、自らの教説を死すべき人間に與へ始めたのである。

邪しき悪魔は、その威力で珍奇で仰天する奇蹟を使い、死すべき盲者たちを魅きつける多くの業を行う〔釋迦という〕息子(まさしく彼のしもべ)にこの世で恵まれたわけである。

中國人はそれら〔の業〕を、表現豊かに、浩瀚な書物や目にも綫な畫像 *icon* を用いて世俗に廣めた。四十九年餘りに涉り、この恐るべき詐欺師は、自分の教説を東洋の遙か彼方まで廣めたのである。時あたかもソロモン王が溢れでる知恵によつて統治していた頃のことである。彼の多くの弟子たちに傳えられている事柄はとも信じられない。というのも、神秘哲學者あるいは偶像崇拜者たるに適した地位をもつ者が八十萬人もいたというのである。さらに、中國では僧 *sem*、和尚 *Ho xam*、タルル人からはラマ僧 *Lama Jen*、シャム人からは *Talepoi*、さらに日本人、あるいはむしろヨーロッパの人々から坊主 *Bonzai*〔複數〕と呼ばれるこの詐欺師に熱心、敬虔に追従する者どもの汚物が至るところに實在することも〔信じられぬ〕。しかも彼らはこの膨大な羣衆から五百人が選ばれ、そこから百人が選ばれ、さらに百人から残りの十人〔十大弟子〕が選ばれたという。さらに彼らは、釋迦死後、五千卷もの書物のなかで、氏族の點からも重要人物で、尊嚴においても際だった者とい

う師匠の賛辭をしたためた〔釋迦牟尼ハ釋迦氏族の聖者ハ釋尊〕。

この新しい神は、ついに自分も不死の者たちの數に入らぬと悟り、七十九歳になると、力衰え、病と運命とに驅り立てられるのを感じた。

さらに、彼が有害な者であることを止めつつあった〔瀕死の時ほど〕、人類にとって、より有害なことはなかった。今や盡きんとする無神論の病毒〔釋迦〕は、極めて忌まわしい言葉を吐いた。すなわち「〔自分は〕四十年餘りの間、この世に明確には眞實を説かなかつた〔四十餘年、未顯眞實〕〔無量義經〕〔説法品〕〕 annos quadraginta eoque amplius non declarasse mundo veritatem.」のであり、曖昧で隱喩的な教えに本質を隠し、比喩・類比や喩え話で、裸の眞實を秘匿しておいたのだ、と公言したのである。

しかし彼は死が近づくと、ついに自分の魂に隠していた考えを明かそうと思ひ至つた。すなわち空虚なもの vacuum、無用〔虚無〕なもの inane、したがって〔中

國人は空虚 Cum hu と呼ぶ〕の他に求められる諸事物の第一原理など何も無く、われわれの望みを置くこともできないというのである。

この詐欺師の最後の言葉、無神論の最初の根源が説かれた事實は、現在、嘘と迷信の雲に覆われ隠蔽されているにせよ、無知な民衆には知られていないようである。ここからまた、今から明らかにする、かの有名な「より外面的な教え」と「より内面的な教え」との教説の違い illa doctrinae in exteriorem & interiorem distinctio が起こつてくる。

〔釋迦の〕遺骸が習俗にしたがい、香木で焚かれ灰儘に歸すると、灰は人々、靈や海の龍（と、彼らは言う）に分配された。セイロン島の王へは〔佛〕齒が送られた。その後、ブリガンサ將軍の兄弟、コンスタンティノ Consantinus Brigantini Ducis frater が、インドでポルトガル Lusitani の物資と軍隊を監督していた頃のこと。コンスタンティノは炎の中、他の戦利品の間からこの齒が取り出されるよう言いつけ、後にこの鹵獲品が、灰

の中や川の流れにバラまかれるように命じた。蠻王は〔佛齒を〕買ひ戻すため自分の遺産を盡くし、莫大な量の黄金を提示した——そんなものはキリスト教徒の支配者〔コンスタンティノ〕の心からは侮られるだけなのに、である。

これはマツフェイ Maffeus<sup>(13)</sup>や、他の歴史家たちによって語られている。大きな迷信で崇められていた雌猿の齒があり、紛失しないよう保管されていたという。ところでこの呪われた悪魔〔佛〕は別の地域では、違った形態、異なった名稱であがめられているが、かの地〔セイロン〕ではポルトガル人が〔佛〕齒を取り上げたために、猿の像が尊敬されるようになったという。というのも他のバカげたお話しのために、教派の者たちはつぎのような話で、輕信な大衆を納得させているからである。すなわち自分らの師匠〔釋迦〕が輪廻によって、時には斯々の、また時には然々の怪物の姿で八千回も生まれてきたからだ。この現世では象の姿で生まれ、死すべき者たち〔人間〕を救うべく舞い戻って來たというのである。

さて釋迦は、私が先に述べたように、弟子の間の混亂もなく、最愛の弟子を自分の災いの繼承者・プロバガンダとして後に残した。その名は摩訶迦葉〔Mahakasyapa〕 *Mo o kia ye* といつた。釋迦は、自分の教説を公にする全經卷の冒頭に、「如是我聞 *ju xi ngo ven*」このように私は聞いた *Sic ego accipi*』<sup>(14)</sup> といふ言葉を提示するよう指示を與えておいた。他には何の説明も論證も必要としないという。明白なのは、他の氣違ひ沙汰の他に、こんな傲慢な言葉がこの師匠によって語られたこと、約五世紀ののち、こうした狂氣にピュタゴラス學派が従つたということである。

佛 *Foe* あるいは釋迦 *Kaca* 自身、著書で自分以前の他の師匠（實は惡魔）について言及している。それは一般に、中國語で阿彌陀 *Omīto*、日本の崩れた言葉である *みだ Amida* と呼ばれる。釋迦は東インド、すなわちベングルに、坊主たちがいふ極樂の土地 *Elysi campi*、中國語で淨土 *can tu*<sup>(15)</sup> があると説いた。願いをかければ、その罪は無數にあらうとも、誰でも許しを得ることがで

きるほど、阿彌陀の聖性と利益は大きいのだと彼らは言う。二つの怪物、阿彌陀 *O mi to* と佛 *fo* ほど、多くの中國人の口の端に度々昇る言葉はない。二つが一緒になった言葉（南無阿彌陀佛）と、その功德によって極めて清淨な者となれるという。すなわち彼らの衝動、原初的慾望、貪り、恥辱から、幾度でも瞬時に解放されるというのである。

他法われわれが先に述べた二つの教説の意義は、外面的な見方が、内面的な見方へと導くための方便だといふ。この教説（人々は特にそれを代用 *substituta*、中國語で權【教】 *kiven* と呼ぶ）は、實【教】 *Ne* すなわち完全な真理であると教ええられる他方の教説が、能力ある者（民衆の中には僅かだが）の心に確立できるまで、暫時代用になる【權實二教】というのである。

彼らは次のような比喻を説く。石の門を組み立てるとしよう。彼は當然、門が完成し、堅固になるまで、足場として最初に木の門を石の上に打ち建てる。それが完成し、堅固になったなら、木の門は解體・放棄される。も

う役に立たないからだといふのである。

この表面的な見方、すなわち假設的な教説【權教】の要點は以下の通りである。

善と惡、不正と正義の區別が與えられる、特に、應報と罰とが與えられ、またこの者、かの者に定まった境遇が與えられる。三十二相と八十種好の恩寵が獲得される（*Beatitudinem triginta duabus figuris, & octiginta qualitibus obtineri*。佛あるいは釋迦自身が、神【性】かつ人類の救濟者である。この理由から、救いの道から迷い出た者たちへの憐憫が生じてきたこと。彼らの罪は佛を通じて贖なわれること。諸々の罪障から贖なわれた者たちは、死後救いを得、安樂に他の國土に生まれ變わるといふこと。

五つの掟【五戒】が存在すること、すなわち一「生ける者から生命が奪われてはならない【不殺生戒】」、二「窃盜してはならない【不偷盜戒】」、三「破廉恥や惡行から身を離す【不邪淫戒】」、四「嘘をつかない【不妄語戒】」、五「酒から遠ざかる【不飲酒戒】」こと、などで

ある。このようにわれらの敵が、健全そうな姿で、欺瞞や陰謀を隠蔽したとしても不思議でない。

さらに六つの憐れみの行い〔六波羅蜜行〕が、教派の者たちに命じられている。特に好意をもって坊主どもを愛護し、彼らの修道院と寺院を建立する。こうすれば、誓願と自發的な罪の償いにより、罪の負債を解く者たちが無くなることはないだろう〔布施行〕。

人々はさらに多くの紙〔紙錢〕や、金銀の像（後世の發明）、そのほか、絹の着物やこの種のものを葬式の際に焼く。というのも來世において本物の金銭や、家具に出會えるよう、また來世に必要な衣類や食料などの品々が十分入手できるように、また残忍で人の話を聞かない十八の城門〔十八地獄〕（彼らはこんなに多くの地獄を打ち建てる）の番人を宥め、和解できるようにこうするのだと言う。もしも彼らがこれらを輕視したなら、疑いなく六道の一つを通じて *per sex viarum unam*、地獄の深淵に赴いたであろう。

こうして彼らは、永劫の輪廻の輪の中で、ある時は獸

の、ある時は人間の姿をして、限りなく慘めに生まれ變わらねばならない〔六道輪廻〕。

彼らは〔六道の〕それぞれの道を骨を折って記述し、取り上げていたら切りのないその他多くの駄辨や、全く老婆じみた妄想を積み重ねる。

ところで筆者は福音の傳道師の觀察が、十分有益なものと考ええる。あなたにとって永遠の奮闘である、彼らの全調査事項を理解するのは重要なことである。

さて今や、より内面的な教説、すなわち最深祕の欺瞞や陰謀を順を追って解説しよう。また輪廻などという足場は打ちやって、われわれはかの隠された幻惑的な眞理の門なるものを——佛教徒はその確實さ（非常に空虚で、空虚そのものだが）を激賞してはいる——學問的に考察してみよう。

だがここでは先ず始めに粗野な大衆は遠ざけられる。（最も劣った人間たちを警戒することが何より大切である）というのも、單純で盲信し易い大衆は分に應じて、地獄の恐ろしさやお伽話を使う必要があるからである。ただ

優れた人々や學のある人々、また修道士や坊主の中でも  
祕密の事柄に鋭敏で、才能が他の者より優れている者だ  
けが考慮される。

彼らが最も内面的で、完璧で眞實と説く教説の眼目は、  
なぜかは知らぬが、空虚 *Cum hit*、*vacuum*、無用なも  
の *inane* であり、あらゆる事物の原理・目的である。こ  
れ〔空虚〕から人類の最初の祖先がその起源を引きだし、  
人々が生きることとを止めるとき、ここ〔空虚〕へと人々  
は復歸するだろう。他にはいかなる條件もない。空虚自  
體はもちろんわれわれのものであり（と、彼らはいふ）  
〔なお「われわれに屬するものは空虚であり」または  
「われわれの特性は空虚であり」とも譯し得る」、われわ  
れの實體 *substantia* である。

この空虚、また同様に要素から、何らかの事物が各自  
生み出されてくる。そしてそれぞれの事物は崩壊により  
再び分解され、そこへと回歸するだろう。

あらゆる事物は、異なる器に盛られた水のように、  
個々の形態や性質に分かれ、分離する。水はある時は綿

のように微細な雪になり、ある時は灰のような雲へと變  
わり、ある時は氷柱へと形作られ、またある時は石のよ  
うな雹に凝結する。

青銅や黄金も同様である。職人はそれを使って、人間  
であれ、獅子であれ、あるいは他の器物であれ、とにか  
く様々なものを鑄造する。しかし金屬が融けてしまえば、  
再び同一のものになるのである〔法藏『華嚴經金師子  
章』參照〕。

したがって、生命、感覺、精神に與えられて存在する  
ものは何であれ、效果や形態は互いに異なっているも  
その原理からは不可分なので、内的には同じ一つのもの  
である。この原理は、生じさせられることも、滅ぼされ  
ることもなく〔不生不滅〕、萬物の中でも完全なもので  
あり、まったく驚異的で、純粹、清澄、纖細、無限であ  
る。

またこの原理は極めて完全で平靜であり、人々はいか  
なる心、力、精神、能力によっても造り上げられること  
を否定する *negant tamen, corde, virtute, mente*

potentivae illa instructum esse。

次に擧げることこそ、確かにその本質に最も固有な事柄である。すなわち何事も爲さないと、何事も理解しない、何事も要求しないということである。それゆえ健全、幸福に生きようとする者は、その原理に可能な限り合一し、人間の全感情を完全に抑制、消滅すべく、不斷の瞑想と克己に努めるべきである。

今や彼はいかなるものにも決して混乱したり不安になつたりせず、ほぼ忘我の状態に至高の観想に吸い込まれ extatici prorsus instar absorptus altissimā contemplatione、知性の使用や推論なしに sine ullo prorsus usu vel ratiocinio intellectus、無上の幸福たるかの神的な靜寂 divina illa quiete を十分享受する。

そのような状態を獲得したなら、萬人ものである發見の方法と教えを、他の人々に廣めなければならない。さもなければ自ら瞑想だけに頼つて、それを得なければならない。つまり人知れず己と眞理とに専念し、かの祕密の靜寂と生命、神性の教えを悦しむのである。これこそ玄義

の究極である Haec mysterii summa。その中には善惡、利害、神の攝理、魂の不死に對する言及はない。

彼らは先にわれわれが見た如く、唯一きわめて混亂した空虛 vacuum と虚無 nihil そのものを説くだけである。そして彼らはこの「空虛」に事物の生成と消滅とを歸している。この空虛は實に萬物そのものであり、萬物に移行し、子宮 uter、卵 ova、種 semen、交互轉換 mutua conversio の四つの道の一つを介して姿を變える。<sup>(16)</sup>

要するにこれは、人もライオンも、石やその他すべても同じ一つのものとするキメラ的な原理である。そこでこのすべてのキメラの観想によって（筆者が後述するように）淨福が得られるというのである。

こうした観想に特に熱心に専念する者は、特殊で新奇な教派に屬すると考えられている。この教派は「無爲教」*Vu gwei kiao*、すなわちいかなる行動もしない教派 *nihil agentium secta* と呼ばれる。これは、われわれが先にインドの神祕哲學者の間ではるか以前から蔓延っていたと述べた學派とほとんど變わらず、中國においても、

キリスト紀元後二九〇年頃、晉<sup>shin</sup>と呼ばれる中國の七番目の王朝の二代目であつた惠帝<sup>wei</sup>の治世から盛んになり始めたのである〔歴史的情報に混亂があるう〕。ところであなたは、この狂氣が極めて優れた帝國の人々、そして最高位の者たちをも侵犯し、驅りたて、皆が木石の自然〔状態〕へと *ad naturam saxiruncive* 顛落したことに驚くだろう。

多くの年月、心身不動の状態に留まり、いかなる感覚や能力をも用いないことで幸福を獲得し、いつかはそこへと還歸すると考えられる空の原理にいつそう近づき、歸入した *propiorque & similior evasisse principio suo aetio* とするのである。

釋迦の二十八代目の法孫、達磨 *Ta mo* は、なんと九年もの間、壁に面して座っていたと傳えられている〔面壁九年〕。彼は壁に向かつて、常にキメラ的な空虚と虚無 *vacuum & nihil* の原理の他は觀想しなかつたが、ついに彼の内に神〔性〕が形成されるに至つたという。達磨は遙か以前から中國で、彼のために建立された巨大で

壯麗な寺院で、その神性に對する尊敬を保持している。

人々は格別にすぐれた尊稱、すなわち佛 *Foe* という稱號を、殊に阿彌陀と釋迦の兩者に與えている。彼らは、それらが全く完全で、あらゆる部分に對して、絶對的な第一原理のある特定の姿をとつて現れたのだという。少なくともその原理の一つが與えられた他の者たちを、人々は菩薩 *Pu ja* と呼ぶ。たとえば觀音菩薩 *Quon in pu ja* など、その偶像は幼子を抱擁する母や乙女の姿、慈悲そのものの形象である。

それらよりさらに劣り、古代ローマの種族のマイナーな神々に幾分は似ている者を、彼らは羅漢 *Lo han* と呼ぶ。

その當時、大部の著作をもつて觀想の教派を排撃したのが、孔子の學徒、裴頴閣老 *CoIaus Pœi guei* である<sup>(17)</sup>。そして彼はアリストテレス的な、「無からはなにもものも生じない *ex nihilo nihil fieri*」<sup>(18)</sup> ということを大いに論證する。

そして裴頴はそれについて、特に實在すると考える非



常に多くの物事が生じただろう原理が、はるか以前に疑いなく存在していたと結論づけた。しかしこの卓越した人物も、過ちが廣く蔓延らぬよう押しとどめることはできなかつた〔裴頴の批判對象も直接には玄學に對してのものである〕。われわれの時代〔清朝〕においてさえ、多くの人々があのような狂氣の觀想に没頭しているのである。

さらに多くの讀書人たちはインドの釋迦の毒に中てられたように、今でも老君 *Lao kün* から傳わる毒に中てられている。讀書人の多くは、その天性から、國家の職務と尊嚴の極みにまで達したのに、大衆の粗野で迷信に満ちた排泄物の中から生まれ、教育されてきたので、幼時からすぐ、母乳とともにある程度吸ってきた生來の國內の迷信を、ほとんど放棄できぬか、放棄するにしても辛うじてやつのことで放棄できるのである。特に人々がその恩寵を請い願う者たちの起源が、故事によつて想起、強化されるときは特にそうである。他の者たちは異國の新しい教えを非とし、重々しい言葉と評決によつて

異端で有害なものであると教える。

しかし私には石の門なるものも、實際には、嚴しい批判に崩れさつてしまふ材木の門以上のものとは思われない。また人々は、外面的な教説〔權教〕の教義、多くの典禮、酒肉の精進潔齋、非常に多くの偶像の怪物や、國家にとつて役にも立たぬ有閑坊主どもの集團を憎んでいたが、他方で、内面的な祕密の教説を甚だ尊重して、傲慢な己惚れと、自らの惡徳の重さに引きずられて罰を被る無神論の底い無き深淵に向かい、結局破滅へと消え去つたのである。

また彼らは、性理 *Sim-ji* といふもつともらしい名前によつて、古くから熟知された明確で優れたものであるかの如く、不正の自然哲學 *naturalis scilicet philosophiae* に、この深淵と破滅とを隠したのである。

彼らはあらゆる錯誤の専門家と見られるのを望むかのように、駄辨を弄し道に迷う。彼らは自分らの時代でなく、過去の全時代の監察官・裁判官でもあるかのように、堪え難い尊大さで、力づくかつ非道にも、民族の古

典を自分の見解に無暗に引き付けて説明する。しかも彼らは卓越した徳と知恵のあった祖先たちの權威に對して、自分の不敬虔さと愚味さを固持して疑うことすらないのである。

この種の罪を犯したのは先の者たちではなく、周〔敦頤〕*Chen'* 張〔載〕*Chan'* 程〔顥、頤〕*Chin'* 朱〔熹〕*Chu* の四人〔程子を兄弟と見れば正しくは五人〕の解釋者たちである。彼らは十九番目の宋王朝の治世下（古代からこちらへ戻ろう）、その注釋で古典典籍を顯彰した、あるいはむしろそれら〔注釋〕によつて、多くの事柄を曇らせ、恐ろしく汚してしまつた。しかし後の時代は、これら諸先生にいわば追從したのである。そして大明王朝 *T'aminggae Familia* の初期に、早くもかの四人の解釋の硬直した見解や權威と同じ程の、新しい有害な學說が現れたのである。

### 註

- (一) *Intorcetta, Prospero, Philippe Couplet et al, Confucius Sinarum Philosophus, Paris, 1687.* の書に關

『中國の哲學者孔子』序文における道教、佛教情報の試譯

しては井川義次『宋學の西遷—近代啓蒙への道—』、(人文書院、二〇〇九第1版、二〇一〇改訂版、二〇一七第3版) 參照。

(2) 後藤基巳譯著『天主實義』(中國古典新書・明德出版社、一九七一)、マテオ・リッチ著、柴田篤譯注『天主實義』(平凡社東洋文庫、二〇〇四) 參照。

(3) マテオ・リッチ著、矢澤利彦譯『中國キリスト教布教史 1・2』(岩波書店『大航海時代叢書』、一九八二—八三) 參照。

(4) とりわけ第一原理と見做される「虛無」「空」に關しては強く批判するが、他方ヨーロッパにおいては贊否兩論の論議を誘發することとなつた。ロジェール・ドロワ著、島田裕巳他譯『虛無の信仰・西歐はなぜ佛教を怖れたか』(トランスビュー、二〇〇二) 參照。

(5) *Theophil Spizel, De re literaria sinensium commentarius, Lugd. Bat., Ex officina Petri Hackii, 1660.*

(6) 井川義次・安次嶺動共著「十七世紀イエズス會士の傳える佛教情報・佛教側の視點からのアプローチ」(『人間科學』(18)、琉球大學法文學部人間科學科紀要) 一頁—二六頁、二〇〇六

(7) 方言音、あるいは不正確な音寫か？

(8) 蝮は母を喰い破つて生まれるという俗説による當てりすりか？

- (9) 獨我爲尊か? 『長阿含經』、大正三卷、四下、他。
- (10) 『マクベス』にも見られるように、帝王切開など、正常な分娩による出産ではない場合、「女から生まれたのではない」と思われていたことからくる皮肉か?
- (11) 大正大藏經、九卷、三八六、中。
- (12) 一五五八年―一五六二年の第七代インド副王、第二世代インド總督 Constantino de Bragança。
- (13) Giovan Pietro Maffei, 1533-1603, イエズス會士、『東インドの歴史』の著者。
- (14) 釋迦の後を繼ぐ附法藏となり、佛典結集を指導したといわれるのは迦葉であるが、釋迦の教えを「如是我聞」といつて暗唱したのは「多聞第一」と呼ばれた十大弟子の阿難 Ananda である。
- (15) 西方淨土が東方と間違えられたのだろうか。
- (16) 佛教にいわゆる「四生」。胎生、卵生、濕生―蟲などの生まれ方、化生―過去の業による生まれ方。
- (17) 裴頠に關しては、堀池信夫「裴頠『崇有論』考」(『筑波大學哲學・思想論集』昭和五十年度、一九七六)、および『漢魏思想史研究』(明治書院、一九八八)五五六頁―五七三頁参照。
- (18) これはアリストテレス以前のバルメニテスの主張のラテン語譯 ex nihilo nihil fit であり、宣教師たちはアリストテレの言と考えている。

## 寄稿規程

編集委員會

一、寄稿者は本學會員に限り、必ず完全原稿でお願いいたします。枚數制限は以下のとおりです。

論考 四百字詰四十枚程度

研究ノート 四百字詰二十枚程度

書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度

國際學界動向 四百字詰十枚程度

なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添附してください。

○外國語による論文要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員會が校正する場合があります。外國語は原則として英語とし、語數は三百語程度とします。中國語表記はウェード方式、あるいは拼音(ピンイン)方式でお願いいたします。

○外國語による論文要旨の日本語原文

投稿に際してはホームペーシ上の寄稿要項、原稿整理票を参照してください。

○本誌に掲載された原稿は、發行より三年経過した後にウェブ上で公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。(詳しくはホームページをご覧ください)

三、原稿締切は、六月二十日、十二月二十日といたします。

四、内容は未発表のものに限り、採否は、當學會に御一任ください。

五、抜刷を御希望の方は、有償でPDFファイルまたは印刷冊子を作成いたします。

六、特殊製版(圖版・寫真版など)、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先 〒305-8571 茨城縣つくば市天王臺一―一―一

筑波大學人文社會科學研究科 歴史・人類學專攻 丸山宏研究室内

日本道教學會事務局

電話 〇一九―八五―二一四〇五〇

E-mail: info@taoistic-research.jp